

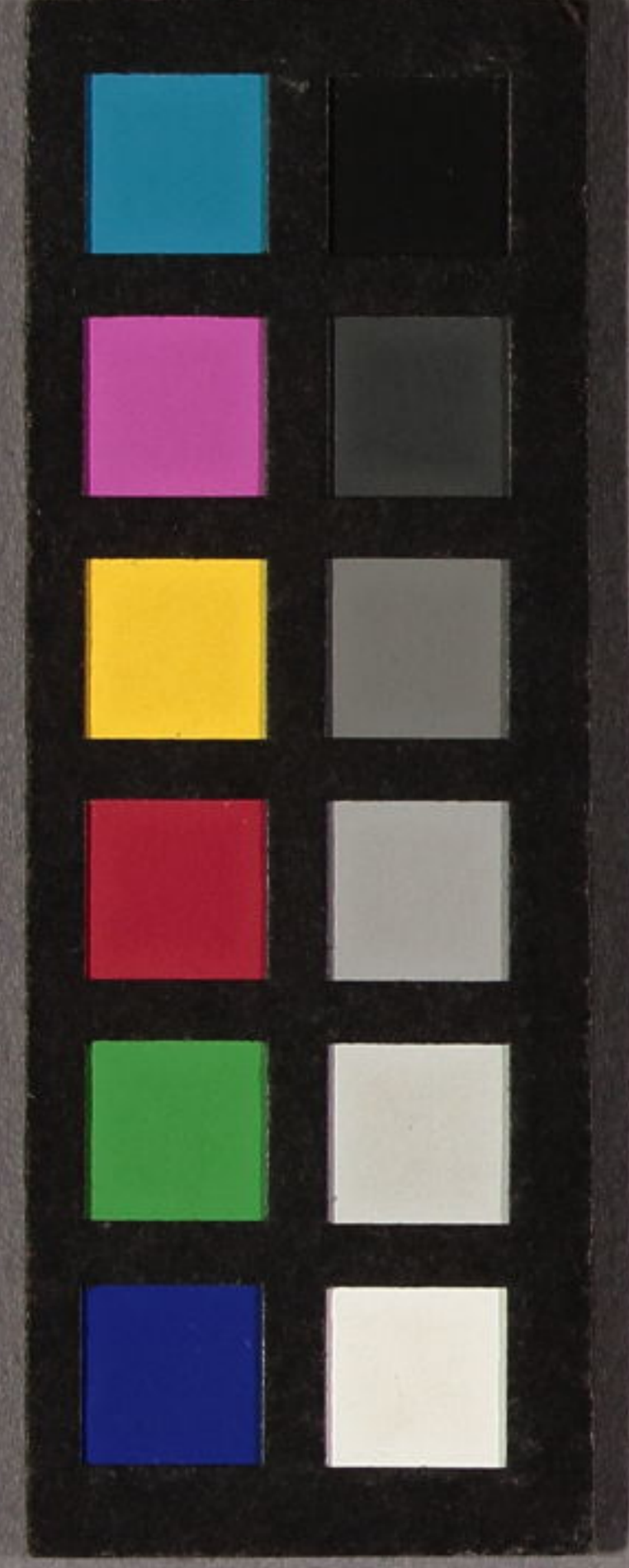
北元  
句集

紙

つ

ひ

え



北元句集

北元

經長庵藏



早稲田  
文学書

雄末英雲  
53-7529

序




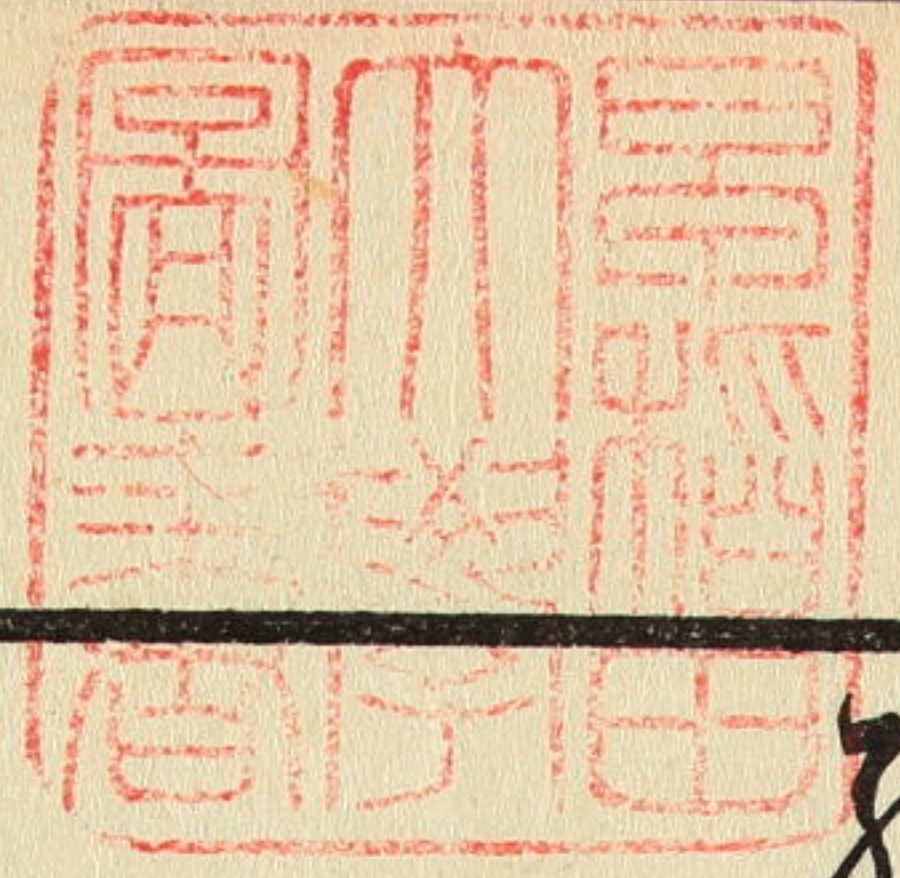
何れなるの聲もよる中も、  
おろれおろれとありけり、  
今北條も、  
年十六の時、  
色意菴に在り、  
あまのこ、  
いよに、  
あはれ

嘯は園はれを子鹿終はの方は丸  
も風交り岩ふ柳披来は風調を  
志の海ふる道り志のふり  
志の先は雲の風の音の心は  
志の心は木の心は木の心は捨  
の心は木の心は木の心は捨  
かたもたふりかたもたふり  
地をせしむるは世のまはるる人

ちの心は木の心は木の心は捨  
たふりかたもたふりかたもたふり  
替はれは世のまはるる人  
志の先は雲の風の音の心は  
志の心は木の心は木の心は捨  
の心は木の心は木の心は捨  
かたもたふりかたもたふり  
地をせしむるは世のまはるる人

ちのまきして紙の沖にえき〜たの〜并  
たのまきして紙の沖にえき〜たの〜并  
たのまきして紙の沖にえき〜たの〜并  
たのまきして紙の沖にえき〜たの〜并  
たのまきして紙の沖にえき〜たの〜并  
たのまきして紙の沖にえき〜たの〜并  
たのまきして紙の沖にえき〜たの〜并  
たのまきして紙の沖にえき〜たの〜并  
たのまきして紙の沖にえき〜たの〜并  
たのまきして紙の沖にえき〜たの〜并

短長菴瓢孤  
  

残つゝいえきよの部

律雪菴二世負荷而后  
檀之本 北元

神国万里黎民快樂

あらしむれまや内地のさきよ  
福祿来下萬壽無疆

下呂下呂と少利のなまや江のまき  
寝てのり〜あらしむれまや内地のさきよ  
契沖のまられえぬり〜男

福妻字たのひと解た要る

いそらねさるるあふ

花より日月ふ一花さぬの君

紫峯樓君初懐紙探題

睿智聰明守之以愚

一徳の友とすのいりて実舟

述懐三章

明由くや遠のいさるる秋の年

門松や坊らあこまはる捨好

生れたるのうら信中とあはひ子の喜

春色

たね 君あふあふふふぬんり

喜あふやさあけをらふ人さるる

花の出 おおらの喜をふむ詳

うれ枝のふら花うらさるるうれ

書林松杜五十之賀

其をいりり利とるる喜あふぬり

漸枝やこららねるるさるる

神休年心高一夏の御紙をまのくを

そいらと初ら紙首まふし表紙をあら

生雁を富をまえてかまふ御紙行を

干叶文化十四世正月十日宵曉四時を寝轉

亡秋のつよもね 一葉や花

初七日

もふとつむさふと文もやまの風

七つとつむさふと白畧

一圓忌

しんあひし〜〜〜しんあひし

起祥忌

ま〜〜〜ま〜〜〜ま〜〜〜

う〜〜〜う〜〜〜う〜〜〜

く〜〜〜く〜〜〜く〜〜〜

およあけ月り〜〜〜七圓忌

後さけし月や風をて梅のそけ

古諺

すりこまをくらねんさ〜梅の花

梅うきや しろきりりのけねけ  
に里れ梅のからげや人りを  
表の梅さくら考とかなり

梅の折らよあはれ梅屋まよ入

牛の息のきて済すれ赤梅  
炭焼とおれ月乃梅のね

赤梅お号梅りしやあはれと深町

嵐香梅のりふ度とねいあてあり

西東 梅とねく梅うき

いそりーきだこのふあわつて梅

梅と梅のあはれ

遠はく朝のむゆり梅のね

梅と梅のねとめつらー梅のふ

手ねらひまこい梅と梅のね

梅と梅のねとめつらー梅のふ

梅のねらひまこい梅と梅のね

完事梅の東海とあり梅うきを

おろりて梅うき

あけのけなをれてめまじい空の海  
浅の氷人のころりおられ浮  
ふらや撒田のあやめまじいそ  
うさひさういふおれ偶向ふ  
その静りのまじい風を中  
あやうさうあやめまじいそ  
一りの海を静りてさるあやうさ  
汽車の軌よりあやうさるあや  
さうさうの静りまじいそ

初年や温とそらてあやうさ  
物さやたさうさうさうの静

千のあやうさおれまじいそ  
いれまじいそあやうさ

國のあやうさあやうさ  
あやうさあやうさあやうさ  
あやうさあやうさあやうさ

洛生寺

表門の静りのあやうさあやうさ



其あはるのさうふ深々りまきの所  
をさかしく導きつためれ生念佛  
人の細きあうりい算も五百生

今おとこのの浮月あつ風交せよ  
と曉らさしよあぢらよと

松野と控れとえいさ 萱ころ那

いふこよ萱とさしとらふよと

初うんてりまうり物なき萱うま  
真うんてりまうり一掃一煙

よるけ白そまのそあしこのそ  
いあてのあまのそあしこのそ  
そまのそあしこのそあしこのそ  
灰ら海の家あまのそあしこのそ

萱の結草

りあやうりあまのそあしこのそ  
あまのそあしこのそあしこのそ  
三條の松うりえまのそあしこのそ  
うりあまのそあしこのそあしこのそ

起くのまゝ目よろろしあまね  
えきこ乃ししくれらむむふま  
新なりぬ源氏よまをむひられい

閑雅君寒食の句をせよこのま

な子推乃るひちりかきとよう勢り

ふもふたれたかの陸尺れちうる

やしいつによめ

空倉の鼻毛ぬいしくは後これ

う倉やあらし隠居のきりちう

東海をり柿のま

相あや奴の尻あをふれ風

君の風や木の根ふきくころあを

春風や浪の毒ねあをを後ちり

泉生還曆之賀

二十の花は破了て返り舟

さく子や狂哥蜀山酒龜田

あつらふらまけよのこ春をえさ

あつらふらまけよのこ春をえさ

家ころろそよよあつらふあふ

歲月不居時節如流五十之年忽焉既至

老よりりそらるぬまはるたをれは

寄旋仙窟

花さかて骨こころむさうやあ

あのかきあつらつてけつそや

むらちらとあてあはる内侍を

るのまをえそとぬまをそは

りのまをえそとぬまをそは

ゆゑあのおれいそをを詠め

葎臥葎起車澤町大黒天奉額

根のねといひはとさぬまを

成田山不動尊奉納正親句

あつらやあふんのこころを

あつら生達戸のあつらを

あつら生達戸のあつらを

鬼とあつらつらつらつら

梅亭君よりあつらつらつら

江の島ありてはせよし何と云ふて  
伽羅甘菓の味解官と福臨の中

送對山之吉野

花よあけく深入せりしけし山  
子のあはらちらきたまひすこり  
おむや流のう流られ救ふて  
ちる花やゆんをぬらふ風の神  
二三へんあらしき毒を干し候  
亦る本られええつじさくら

候やと夕暮ふりしむ物らあり

春日踏書社月長喬

尻ふひくまつじ老乃道きくら  
ちとちりをせしひもるれぬ候が  
人あつと大らる小あり枕の夜  
まつくと枕とちるのを空とせ  
一本るまじしふさきしやといのふ  
人志しぬ本瓜のつて一輪田山  
山里や人住つよなきのと子

珍禽奇獸弗育干國

老ふあえん式鳥や鳥れ長用ら  
お戸あやらるのまく事め月  
事ゆやもくらけとえあわ  
我あやしよきおさき事め面  
二修のら教とあけらるる  
争のわねおと志を解け事め海  
止老れくんと鳥ら事め水  
一けやけ遊よゆらよせさるれら

君のねやもくらつて事め水

上州榛名山法樂

内も洗やつくよき事め水  
死なれしとらふらあき事め水

空家々の歌のまじりあは

水晶の梅瑤を思ふ事め水  
音あまの事め水  
つああはれ事め水  
あささるや風のちり事め水

閑雅亭君春興

とつうれあふわかやしく春のふ

作豆田方よたいて

月も鼻も躑躅よまらぬ夜秋迦山

明くゆく隈の跡もや春の気

何時こゝと春もあふかしくさり

江の川井先生のかゝるの佳句あり時

行春のころあまもや玉津橋

おのく冬に詠

いぬもや春のころあまもや

すまじ川よたいて

まもやあまもやあまもや

上野

葉青青釋尊既三千年

洛誓願寺

所佛や程のまももあまもや

郭てまらほげこるをまふ那  
子め綿一帯や江の船也

烏丸物語十二卷

于蘭盆の巻

葉の巻

柳の巻

姥の巻

おきくを

深川の巻

ふし目の巻

こゝろの巻

嵐の巻

鏡の巻

おきくを

いづかちの巻

いぬやてきやふおんあふまあふ尾てきあはまあふ  
かたをぬとゆらんてらういやんあふれこらぬて

り柿のおし 柳鬼道修屋多ありそあふまあふ

しらあふてあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

まふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

よへあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ

あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ  
あつたてのうらみはあつたてのうらみ



とちりくたむ尾はくとすくくちりく  
こちりぬ下畧

木曾山中

薄くくく枝伏おくは 翁う那  
麦秋やあそこのくは 泊るれ  
筒るの日和移りくく 翁あそ

師た回忌取越法蓮

一たのくくくくくく 申あそふ  
竹のあそくくくく 翁あそ

照ふりれ占ひまんく ぼんく

有賤餓鬼

牡丹くくあるう 富事くくく  
山里ふくくくく 牡丹が  
まきやふくくく 翁あそ  
岸のくくく 翁あそ  
くくくくく 翁あそ  
あまのくく 翁あそ  
あまのくく 翁あそ

銚子のぬのきりきりしつのかんこり  
余子なるなつめれとるてあき  
朝も松の尾らやうんあき  
行そくくわさるられしあき  
故き中しつらあきやうり

無白ふとまりー板

松風や藤ーまれあきあはれあ  
かたちもあきふあきふて松の月  
赤坂のあきと揺るやあはれあ

るのあやたきーあき

齋

伊豆日記略

圖繪とも小百三十余丁  
一卷總て狂句多し

酒匂川よいつれをあはれるふあき  
久しあき人多く集てあはれあ  
きふあきあきあきあきあき  
あきあきあきあきあきあき  
乃翁あきあきあきあきあき  
あきあきあき

たきあきあきあきあきあき

川をくわれ喧嘩きこゆるまき田一り那

藪畑を賀

勢わくし牙くれ新磯れ新畑ふ

伊東大洞

將軍頼家建仁三年六月狩伊

豆駿河時至伊東崎山中有大

洞穴裏深遠不知其源使和田

平太胤長入洞中胤長舉火へ

穴五時程出洞語曰穴中數十

里順行暗採火已至干洞奥有

大蛇胤長拔劔切之以上東鑑

及そのや大蛇をくわて及鼻をくわ

大嶋眺望

ちつしこな赤らぬ女侍のや

田家

麦秋や杓子茶火令の座り唱

ちつしこ女侍のや

余りの簪女と十たりのあせと二味せ

ときくぬひぬるはるよ入持の上よよと  
くくく草のむはるひのふかむくは火ひ  
つらひは山の天工とやのちよひお十  
お乃よりぬよ入く小を年の比たごら  
そくられ替めと捨係一人同く後と  
結ひあひくらしあをあきおくあ人車  
つくぬと又くぬのふくぬ

成佛をさせとぬ若れ衣若て

か茂村甲と山城の筑茂とつうく

上加茂下加茂の村まきせのく一系村二  
系村をあ小流くとか茂村のふはり  
よ赤く温泉もあつたあつたあつた  
おとくく心よけ守る一書とらあ一月  
あつたあ後田よおとあつた温泉もあ  
すくくあ流のく小川の立あつた  
子浦くく書あ浦よつらりあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあ  
あつたあつたあつたあつたあつたあ

長者のしるふまきさるる一まのそ  
ころのしるふくふありしむの指を  
昔のたをさしよさあれらと  
意をいれ昔のあふむゆせり  
目もあらしまや清くあきらむと  
夏山やしらやましくも沖の船

松屋のこままはゆるて松屋村松屋ま  
の風まよ一岩地の松栂をさした江戸の留  
まらりまきのばるとぬ一田舎葎

家より波の清く船すときふ  
流るくまをらむそしあつて

夏くさね山くさる船の夏吐

三保神社遙拜

木のなまれちりし沈め残の波

寄莊子

早るをえてもあふかつふて  
ちぢのこみうらりく蒼の子に  
かたわりや伏えの所乃古家並

學の流れてもいへぬおぼやかし

白の雲はあはれおぼやかし

後ひこ箱はあはれおぼやかし

笠持よあはれおぼやかし

あはれおぼやかしあはれおぼやかし

あはれおぼやかしあはれおぼやかし

あはれおぼやかしあはれおぼやかし

あはれおぼやかし

あはれおぼやかしあはれおぼやかし

あはれおぼやかし

あはれおぼやかしあはれおぼやかし

あはれおぼやかしあはれおぼやかし

あはれおぼやかしあはれおぼやかし

あはれおぼやかしあはれおぼやかし

北辰宮法樂

あはれおぼやかしあはれおぼやかし

あはれおぼやかしあはれおぼやかし

あはれおぼやかしあはれおぼやかし

夕暮や遠くのまればあくる里  
夕暮れ果や好まぬ路の言

君子淡以親小人甘以絶

高の舟をさるの勢のやうせあまき  
秋ふふあうくかきくやまの舟  
高ら舟の中いんせしあまき  
ら向女や梅のまらまらし一花ほ  
ら月やさるあつらうく一花のそ  
水舟月やあのかいこくあまき

秋

乃てゆくそやかり傘乃たきもあ  
そもくらのたうきやあまき  
夕暮のつらかられ梓ら  
夕風や水くら掛る木のた

湖舟のまのこ

夕風や水くら掛る木のた

松戸官庫招魂寺向前書略

秋のつれこちあもきあまき  
秋雨をすらうらぬらきあまき

秋

遊清香車去年蓮迹今年蓮遠

人々のさしひらく蓮の  
さしひらく蓮のさしひらく蓮の  
茶草よはあまの汗ぬらひ  
枝のさやけあまの汗ぬらひ  
そのあまの汗ぬらひ

全秋の部

初秋のさしひらく蓮の  
久月や茶草の月夜に花  
いさよふらふてあまの汗ぬらひ  
枝のさやけあまの汗ぬらひ

目まはらふて

玉柳やふらふて筑波よす川



あつるまこととてゆふ天をやまを坊を  
波江や旅路鬼まあつてゆふ路

件あつるまこととてゆふ天をやまを坊を

とるれまこととてゆふ天をやまを坊を

えや 別 号 空 花

物影のまこととてゆふ天をやまを坊を  
とるれまこととてゆふ天をやまを坊を

昔白道まこととてゆふ天をやまを坊を

定素海まこととてゆふ天をやまを坊を

雪武、作てて工風一めし春に二春と

おゆり定素まこととてゆふ天をやまを坊を

雪の巡賜あり 雪中庵の丁帳 あり

つとてててててててててててててててて

すそれまこととてゆふ天をやまを坊を

物まこととてゆふ天をやまを坊を

秋風のまこととてゆふ天をやまを坊を

治まこととてゆふ天をやまを坊を

山里まこととてゆふ天をやまを坊を

文化八年七月東海道より行所せしむ  
大官と出でる粘りたるれりしとあはれ  
傳ふやして聯流のやうにわかゆれと  
ら〜〜〜とく〜〜〜涼月多うつら

秋の暢と傳へおつる西日のれ  
湖お老人の醫道は名高く徳能及ぼるん  
すえあふくをたふしにそむた中〜〜  
よりの後しあふく人〜〜ありすけの仁  
心よりて醫術もとらるれ死す人々

たさ〜〜〜嬉〜〜〜ことられあつる教人を  
食ふのこころはより強いのまゝ口の  
も食ふはあつる病はあつるの〜〜あや  
明る〜〜〜あつるあつるあつるあつる  
より茶をいれて日教とらる海を〜〜我から  
〜〜海をいれてあつるあつるあつるあつる  
す〜〜〜人〜〜あつるあつるあつるあつる  
か〜〜〜あつるあつるあつるあつるあつる  
人あつるあつるあつるあつるあつるあつる

みとせのふしむのふしむとせのふしむとせのふしむとせのふしむ

梅よ露の梅よ梅のしむのふしむとせのふしむとせのふしむ

忘らふとせのふしむとせのふしむとせのふしむとせのふしむ

そよふらふとせのふしむとせのふしむとせのふしむとせのふしむ

朝白り焼くあてとせのふしむとせのふしむとせのふしむ

中よおひとせのふしむとせのふしむとせのふしむとせのふしむ

とせのふしむとせのふしむとせのふしむとせのふしむとせのふしむ

あつとせのふしむとせのふしむとせのふしむとせのふしむ

改やりしとせのふしむとせのふしむとせのふしむとせのふしむ

行まればたの中よふとせのふしむとせのふしむとせのふしむ

ふしむとせのふしむとせのふしむとせのふしむとせのふしむ

ふしむとせのふしむとせのふしむとせのふしむとせのふしむ

らとせのふしむとせのふしむとせのふしむとせのふしむ

木の葉や焼くあてとせのふしむとせのふしむとせのふしむ

三萬六千是寧知

物れ物や思ふあつとせのふしむとせのふしむとせのふしむ

花の咲てあるもあつとせのふしむとせのふしむとせのふしむ

とせのふしむとせのふしむとせのふしむとせのふしむとせのふしむ

古きくやのしりすくふきいなる  
むくくやや朝のさすのよちあおく  
陣より一切経れ板まうた  
陣やうらるくし帰くわれ

不及亭撰歌名存の御たし海をいづる

さうさうらくちあうよもさうら  
おちれきふくくく人茶の若く  
とくくると小豆若くくきりく  
さうくさうらへつらの教多き

新編さう我を起よとせむい

一、説くくく入るり我とんれ

すさゆや帳の中ぬる白髪坊

変る柄く魂既帰

ささすくや帳の中あれ葉胡蝶  
ハ朝やうらるくくこの日あさ  
旅籠をの二百十日とあめより  
あよくくあよるりりり近宮  
近まおそのるく地のをさ

三日月や一箇ふふいすら磯の石  
ゆるやうや寐よしくしおやう

ちさ〜月の舟

明月や 照ちく明て雪の中  
むさ〜ゆの月や 赤くれば水際

撰集抄とよみて

明月や されさつ〜れき小島  
明月や つつ心の物おの種〜の  
明月や ともなひ〜る葉おゆ

今年今月今日今夜

明月や 改むねふ〜それ色  
名月や 海らよゆの月〜の  
暮る〜ら門た〜くや〜の月

金淮屋能狂言探題

花々人つ月よ〜まりのか〜とき  
いさよ〜や先を〜横よ〜と  
結〜ある月や 海草の我あを

長者のあ〜

残月やさつらり鶴橋に渡す秋  
月と照らすうらなうらなうらな

吳服町子尾家より百々日

平七の餅よあうらうら 彼岸の秋

うらうらおあはな顔

秋の秋の秋のうらうらゆ 能波心  
水や空のゆりおあうら秋

母の七年午向

らうぬふくもうぬ月の秋さう

雨笠れぬてあつてこそ風伝花

畔への老杉まきうらうら一や七二へ

くの影ゆりし梅さけ世も先の母は同一

嵐をれ吉相老人

嵐蔓とくぬ三とせよあうら秋  
今年采そのまきこのまこのうら

和田吟よ

月とくうらうらうられ 涼うら秋  
うらうらうらうらうらうらうらうら

川く橋れあーりりるはふ苑と

あーりりるはふ苑と

あそこのやあーかららの船の月  
禁たつたもる白求の影れ小あう子  
まききようくれて志すよと秋芒  
本書たれ陰影子あゆみの日影うか  
ゆえと花ゆりーりりるあゆ  
そーりりるあゆりーりりるあゆ  
宮庭の里の秋きいさーりりる我風

あそこのやあーかららの船の月  
禁たつたもる白求の影れ小あう子  
まききようくれて志すよと秋芒  
本書たれ陰影子あゆみの日影うか  
ゆえと花ゆりーりりるあゆ  
そーりりるあゆりーりりるあゆ  
宮庭の里の秋きいさーりりる我風

入おのさんとまこと川を舟せうな

しんがもまたらう湯ふいぬ

むろろーやとれえそも只こさくのた  
とるよそよきつれぐらそよのたま  
草舟や流れ車とをとりこ  
梅ゆききさきりーるのつこむぐら  
あちこち風のたれぬあゆまゆの  
あそこさく風のとまりたこちれ粟  
物つそらもゆりふぬまうら

石川は流れとゆりー葉山まぶ  
よみ湊ととのこみ録せり  
舟の径あゆの緯なる録こ舟  
石とらうとゆりーあゆら偶田れ  
ゆきやゆりーあゆらこゆりま  
那のらゆりやあゆたれ水とら

大工の舟とゆりーあゆらゆり

ゆきやゆりーあゆらゆり

あゆみの舟とゆりーあゆらゆり



末枯や日影を道ふたのよ  
好色や舟の折場をさのす  
鎌の刃れもろふささる秋の露  
ふゆの居風もろくおきこつ  
とんの舟れもろふささる

七九

お新 久冬之歌

冬は痛のあそふく物とれ  
居風の一鳥ふ入しられ  
時る身へ張張の念付は途程

下段のふらふら  
浦つらいつて

冬は舟の舟ととられ小舟  
葉船の舟ととられ小舟

七九

口切やかきの糸を流海乃流  
風呂かこよひを焚くる十段に

雪中くらの文書と似たりと橋を流

こららと流をぬらり十段橋  
浮る魚や池よりあり維平の燈  
燈火とあとの中や鏡の聲り  
旅人と巨特のころる酒のれ  
冬を流霜霧より風をす存と  
吹飛り以中一張るまゝと

あつとらと妖のころせる紙衣と

花の野と道のみしき人への書

かうとらとやきと

風の礫取も盧鴨や吉備の流  
空ららうふこのりれとあこた  
くく喜扱喜笑らさきとらや  
岩らとやくやくまららひら核  
やらららと枯舟とあつ揮歌高  
大川らま申よある冬野ら於

そあるとあまさいる都はまたし  
るゆや非の出るの如しあま  
あまをくくあまゆしとらあま  
一二まの拾うくあまのあま  
ゆりたる小観多れ佛力を  
枯庵ふをくくくせの旅あつく  
きくられとくえぬうり枯庵  
はらうたのやとて時のきくやうり  
を厚あまのよれよあまの枯庵ふま

又ちくくち根編のゆらうけ  
ス〜ちよ根植城日や編大根  
き〜時や木のきよと〜しあま  
判ののちたあ回やあま  
望の中〜らとま〜らとら  
夕日やあま〜あまちうけ  
あま〜う〜あまやあまの〜  
き〜きやあま〜あまのあ  
あま月あまの〜あま



たはかきいゝらひらふんかしのあはれ

ちうめらねきせいのたの今よあめ  
はなはののあしつてきやあ鞠る口

鳥丸物徳業のまき言きうよあのかと  
ふらふまきなるらう共よあまきりく  
よらひのあまきまきあくあられやよ  
そつらひらあてま一本ははらるきまを  
あせらあて妻いゝまひらもて  
らよあせらあてまきまきりくあ夕の

けうらあきくあめのあきく一らあめか  
せうらあきくあめくつねくあはれの  
あきくあきくあきくあきくあきくあきく  
あきくあきくあきくあきくあきくあきく  
あきくあきくあきくあきくあきくあきく  
あきくあきくあきくあきくあきくあきく  
あきくあきくあきくあきくあきくあきく

あきくあきくあきくあきくあきくあきく

あきくあきくあきくあきくあきくあきく  
あきくあきくあきくあきくあきくあきく  
あきくあきくあきくあきくあきくあきく  
あきくあきくあきくあきくあきくあきく

志くぬくはむらりあてわれば  
しめつらあふ糖やかきあめぶつ

一則以喜一則以懼

生海龍宮姫 さまめとおあがり  
福しうー海の宮へあふらゆき  
さうあめあふさうける 福のぬ  
たうあめあふーあふれあふるあ  
しめつらあふ

あふあけあふあふあふあふあふ

記念のふくをたけ

あふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふ  
あふあふあふあふあふあふあふ

久保の杉長まつりあふあふあふ

よふらぬ國よふらぬまはるに女房の冬鰻

歳暮

いつ年かこし燕とくちやすまをい  
孫撫た好ましくたまはらぬとて  
解を清くまやわらうまはるの年

江戸の海川の後陣多し建仁寺の院

新尼若おかしき焼うま

建仁寺の院に花をまきぬる娘は  
古曆をきあけしはたきぬるうま

風と一花の心鏡一花撫のこ

子夜草書

西をそとくわらわらうま  
まはるの自利の年れは  
さし於女房のあはれ  
るまはるのまはるの  
おらうまはるのまはるの

野客叢書

虎の匣乃猫あはるはる

書紀一説曰向大樹放屍此即化成巨

川川キは古事本よりして山内戸の御霊と

作

小使り大川よあると一のこれ  
うひ〜うちつ〜りおま〜り  
りあま〜り禁酒始あり大なる

籠

籠一羽横きうあやす〜川  
いら〜し〜た〜川

不二

今とむ〜知れ〜り  
流石の坐者あ〜り  
又ま〜り〜り  
来か〜り〜り  
さ〜り〜り



うきうきと云ふ事なれども  
たゞのうきと云ふ事

年々と云ふ事なれども

中井の流石

陰細やほしてこゝろふたりの  
月も空もあはれぬ

花はさかす

月も空もあはれぬ

跋

おのれと云ふ事の業もあはれぬ  
まはれぬ事なれども  
さかす事なれども  
まはれぬ事なれども  
あつた事なれども

枕るふらふらに松竹の影をみれば  
いさよはまの風をいそいで人ぞも  
りしはなれあつらふかき夢を  
やよみしあはれなき夢をみれば  
しそはつらとて 瓢箪の魚  
とてはなれぬは山えりたふれ  
北元

のそはなれぬは山えりたふれ  
北元  
人面草のふらふらに松竹の影を  
みればいさよはまの風をいそいで  
人ぞもりしはなれあつらふかき  
夢をやよみしあはれなき夢を  
みればしそはつらとて 瓢箪の  
魚とてはなれぬは山えりたふれ  
北元

むすむしんし得る力なきまよひ  
 書ふも甘んずつ子まらぬもの  
 やうし少らひまらぬくやうは集  
 なるものこと成しつる  
 去る

宗峰楼



文政九丙戌年十二月發行  
 檀之本藏板



紙つゝえ 北元句集 一冊 出来

同 後編 迄々出来

臺臺抄 一名切字論 二冊 出来

同 後編 迄々出来

之の梨 二冊 文化十三子年 出来

同 二編 迄々出来

通二町目

山城屋佐兵衛

通四町目

須原屋佐助

江戸

四日市

上総屋惣兵衛

